

茨城大学学報

第265号

平成18年2月～平成18年3月



新しい表札を付けた水戸キャンパス正門

INDEX

- ◆中性子応用科学の講演会を開催
- ◆「環境にやさしい農業推進大会」を開催
- ◆茨城産業会議との連携による「理学部研究室訪問交流会」を開催
- ◆阿見町と茨城大学の地域連携シンポジウムを開催
- ◆茨城大附属中の生徒2名が文部科学大臣奨励賞
- ◆阿見町と連携協力協定を締結
- ◆茨城県霞ヶ浦環境科学センターとの共催で地域連携シンポジウムを開催
- ◆平成17年度茨城大学卒業式
- ◆4大学大学院連携協定を締結しました
- ◆「NHK県域デジタルTV放送」茨大タスクフォースだより
 - 2月号
 - 3月号

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

中性子応用科学の講演会を開催

本学では、平成 18 年 2 月 1 日、3 人の講師を招き、理学部総合研究棟（水戸キャンパス）において教職員・学生等を対象に中性子応用科学に関する講演会を開催しました。

茨城県が策定した科学技術振興指針（平成 17～22 年度）の中には、「中性子を活用した産業振興に向けた取組み」の推進が掲げられています。これは、現在、東海村に建設中の J - P A R C 【大強度陽子加速器施設】内に、県独自に中性子ビーム装置を整備し、物質や生命物質を解析し新素材や生命科学等を大きく発展させようというものです。

昨年、県から本学に対しこの装置の維持管理等の委託が要請され、教職員や学生が J - P A R C 構想の意義等を正しく理解すべく、このたび講演会が計画されたものです。

茨城県の今瀬科学技術振興室長は、「J - P A R C と茨城県～県が茨城大学に期待すること～」と題して、県が構想している陸・海・空の交通ネットワークによる人・物・情報の交流拡大、一大先端産業地域の形成、科学技術創造立国を先導する枢要な拠点についての説明や、中性子を利用した産業振興に向けた取組みなどが紹介され、本学の協力を得て推進していきたい旨話されました。

日本原子力研究開発機構の鈴木氏は、科学技術は、ものを「見る」ことから発展してきており、大強度陽子加速器施設は原子や分子を今まで（光や X 線等）とは違った世界（粒子）から見るための新しい装置であること、技術の最先端（物質・生命科学研究）はもとより知識の最先端（原子核素粒子研究）の研究まで及ぶこと、加速器施設には電気機械としての安全性があることなど、身近な例えを多く引きながら説明されたため大変解り易い内容でありました。

本学大学院理工学研究科の坂田教授からは、茨城大学中性子（量子ビーム）応用科学研究センター構想と題して、世界的な研究拠点、産業クラスターとしての確立が求められていること、そのためには関係者への協力・支援要請が必要であることなどを説明されました。

なお、農学部阿見キャンパスでは昨年末に同種の講演会が開催されており、今後 3 月には工学部日立キャンパスで開催されることとなっています。



理学部総合研究棟での講演会の様子

「環境にやさしい農業推進大会」を開催

本学では、茨城県との共催による「環境にやさしい農業推進大会」を、平成18年2月2日（木）、茨城県市町村会館において開催しました。本学からは海老澤理事、松田農学部長を始め関係教職員、茨城県からは内畠農林水産部次長を始め県関係者が参加し、県内から農業者、農業団体、消費者代表など約390人の参加を得ました。

大会は毎年開催され、今年で4回目となります。パルシステム生活協同組合連合会新農業委員会委員長齋藤氏による「消費者が期待する環境に配慮した農産物と信頼関係のしくみ作り」が講演された後、「環境に配慮した農産物 - 求められる条件と期待」をテーマにパネルディスカッションが行われ、有意義な意見交換が行われました。



挨拶する松田農学部長

茨城産業会議との連携による「理学部研究室訪問交流会」を開催

本学では、2月17日（金）午後2時から、茨城産業会議（茨城県商工会連合会、茨城県商工会議所連合会、茨城県中小企業団体中央会、茨城県経営者協会）との連携事業である「理学部研究室訪問交流会」を開催しました。

この事業は、21世紀を先取りする理学部の各種の研究成果や技術情報等を提供し、産業界の振興に資することを目的として開かれています。今回は、近年環境の持続的な保持が世界的な命題となっていることを踏まえ、全体テーマ「技術革新の芽は理学部から～新材料・エネルギー・環境～」のもと、「新材料・環境・エネルギー」に焦点を当てて実施し、企業等から52名の参加を得ました。

訪問会は、菊池学長及び渡邊理学部長の開会あいさつに始まり、西原美一教授の「磁性材料の基礎研究と産業利用の開拓」、佐久間隆教授の「中性子回折によるエネルギー関連材料の開発」、金子正夫教授の「太陽光化学エネルギー変換による再生可能エネルギー資源の創製」、学長特別補佐三村信男教授の「茨城大学における地域環境と地球環境をめぐる研究」についての研究事例紹介が行われました。

続いて、参加者を3班に分け、西原・佐久間・金子研究室の訪問が行われ、参加者は、それぞれの研究成果に熱心に聞き入っていました。

次いで、企業関係者及び大学関係者が出席し、大学会館（茨苑会館）1階において交流会が開催され、茨城産業会議の石川 享専務理事による挨拶、乾杯の後、産学官からの出席者との有意義な情報交換が行われました。



研究成果の説明を受けている様子

阿見町と茨城大学の地域連携シンポジウムを開催

本学では、2月18日（土）、阿見町との共催で、シンポジウム「自然と農業を活かした地域づくりをめざして」を阿見町の本郷ふれあいセンターにおいて開催しました。

同シンポジウムは、全体テーマを「住民・行政・大学のパートナーシップのなかで」とし、第1部から第3部までの構成で実施されました。

第1部は「阿見町と茨城大学 パートナーシップの新しいステージへ」とのテーマのもと、阿見町長及び茨城大学長（代理：学長特別補佐）の挨拶があり、農学部附属農場長から、茨城大学現代的教育ニーズ取組支援プログラムの紹介がありました。

第2部の記念講演では、東京農業大学客員教授森山弘氏による「自然を活かして元気な地域づくりを」と題した講演会が行われました。

続く第3部では、「阿見町の自然と農業を地域づくりにどう活かしていくのか」をテーマに本学農学部教員の司会でパネルディスカッションが行われました。パネリストは、自然再生の住民グループ、農業者、町民、学校関係者、学生、行政代表者など幅広い層の方が務め、活発な意見交換が行われ、今後の地域づくりの在り方を探る有意義な機会となりました。

なお、このシンポジウムは、阿見町と茨城大学の連携協力協定のイベントと位置づけられたこともあり、本学からの参加者は、農学部長、学長特別補佐、農学部教職員、うら谷津市民農園にかかわっている学生など、阿見町からは町長、教育長など町役場関係者多数、また、近隣の地域からは、一般市民、農業者、農業団体、自然再生の住民グループ等合わせて約200人の参加があり、盛会となりました。

終了後、茨城大学農学部で行われた「懇親交流会」には、菊池学長も参加し、和やかな雰囲気のもとで交流が深められました。



挨拶する三村学長特別補佐

茨城大附属中の生徒2名が文部科学大臣奨励賞

昨年8月18日に開催された全国公募の第18回日光山全国書画コンクールで、本学教育学部附属中学校1年生の高島睦子（たかしまむつこ）さんが第1位になり文部科学大臣奨励賞を受賞しました。

また、1月21日～22日の2日間、つくば国際会議場で「第6回全国中学生創造ものづくり教育フェア」が行われ「全国中学生ものづくり競技大会～めざせ！木工の技チャンピオン～」部門に、同じく1年生の萩野谷大（はぎのやだい）君が関東甲信越代表として出場しました。初日の作品製作と2日目のプレゼンテーションの審査を経て、第1位となり文部科学大臣奨励賞を受賞しました。1年生での受賞は初めてことです。

両名は、2月28日に菊池龍三郎学長を訪問し受賞の報告をしました。



学長へ受賞の報告をする萩野君（左）、高島さん（右）

阿見町と連携協力協定を締結

本学では、平成18年3月3日(金)14時から阿見町役場全員協議会室において、阿見町と連携協力協定を締結しました。

締結式は、阿見町から川田弘二町長外9名、茨城大学から菊池龍三郎学長外10名が出席して行われました。

参加者の自己紹介の後、代表者による協定書への署名、川田町長次いで菊池学長の挨拶があり、それぞれ協定締結に当たっての抱負等が語られました。

締結式の最後には、記者団から多くの質問がありました。

なお、本学と阿見町は、それぞれ相互に、人的・物的資源の活用により連携協力し、地域の発展と人材の育成を図ることを目的とし協定締結の運びとなったことから、今後は連携協力事項に沿って、いくつかのテーマを設定し、地域活性化の連携事業を行うことを確認しました。



連携協定を交わした菊池学長(左)と川田阿見町長(右)

茨城県霞ヶ浦環境科学センターとの共催で地域連携シンポジウムを開催

本学では、平成18年3月7日（火）、茨城県霞ヶ浦環境科学センターとの共催でシンポジウム「茨城県の湖沼環境をめぐって」を同センターの多目的ホールにおいて開催しました。

これは、昨年4月に茨城県霞ヶ浦環境科学センターが設置されたのをきっかけに、本学が本格的に同センターと連携し水環境の改善研究に貢献する第一歩として開催されたものです。

シンポジウムでは、前田霞ヶ浦環境科学センター長の挨拶があり、次に天野理学部教授から連携研究の意義やこのシンポジウム開催の趣旨説明がありました。続いて、連携研究の可能性を追求するため、双方で行っている研究内容等について以下の報告がありました。

[霞ヶ浦環境科学センターから]

- センターにおける研究活動の概要・他機関との連携研究の現状と可能性
- 霞ヶ浦における優占藻類種の動態及び優占機構に関する調査研究
- 霞ヶ浦の溶存態有機物に関する調査研究
- 霞ヶ浦のリンの増加原因に関する調査研究
- 霞ヶ浦の白濁現象の研究

[茨城大学（水・自然環境との共生プロジェクトメンバー）から]

- 北浦の生物環境の研究
- 湖底堆積物による環境の研究
- 霞ヶ浦地球化学的研究
- 涸沼の生物環境の研究
- 霞ヶ浦環境の三次元シミュレーション

これらの事例を基に、連携研究の可能性について自由討論が行われ、活発な意見が交わされました。今後、「大学との連携によるセンターにおける普及活動の可能性」や「連携による教育プログラムの可能性」を探る有意義な機会となりました。

なお、このシンポジウムは公開とし、双方の関係者や学生のほか、近隣の一般市民にも参加を呼びかけ、約70人の参加を得ました。



挨拶する前田霞ヶ浦環境科学センター長

平成17年度茨城大学卒業式

平成17年度卒業式は、3月23(木)午前10時から茨城県武道館において、学長、役員、名誉教授等の参列のもとに挙行されました。

式は、本学吹奏楽団の前奏に始まり、菊池学長から学部、大学院及び専攻科の卒業生、修了生の学部等の総代に学位記、修了証書が授与され、学長告示、卒業生、修了生の全学総代 新明健一(理学部)の答辞と続き、最後に参列者全員で校歌を斉唱して閉会となりました。

なお、今回巣立った卒業生は、2,182名でした。



平成十七年度卒業式告辞

茨城大学長 菊池 龍三郎

梅の花が馥郁とした香りを漂わせ、加えて長く厳しかった今年の冬の辛さを穴埋めしてくれるかのように、逆に桜の便りも近いとか。あたかもみなさんの卒業を春が一度に祝ってくれるかのように思われます。

本日、茨城大学を卒業されるみなさん、ご卒業本当におめでとうございます。茨城大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

みなさんには、ただ今、おひとりおひとりに学士、修士あるいは博士などの学位記や修了証書をお渡ししました。またこれとは別に、多くのみなさんに教員免許状などの様々な資格もお渡ししました。

さらに今年度もまた、卒業生のみなさんの中には、スポーツ、学術、ボランティア活動、芸能等の様々な課外活動の分野で優れた成果や成績を収めた方達が大勢いました。これら方達の努力と活躍を称え、本学のために果たされた貢献に対して心からの敬意を表したいと思います。

皆さんが入学されて3年目に全国の国立大学は一斉に法人化し、厳しい競争時代に突入しました。そういう中でも、皆さんの茨城大学は、今、着実に成果を収め、注目される大学になりつつあります。その例を1、2ご紹介したいと思います。



昨年は農学部の先生方と学生達が地域の方々と一緒になって頑張ってお返し、いわゆる国の競争的資金のひとつである現代GPに選ばれました。これは大変な成果です。また、研究面では、大強度陽子加速器研究機構、いわゆるJ-Parc構想への参加に加えて、先日、東京大学を統轄大学とする「サステナビリティ学連携研究機構」に、京都大学、大阪大学、

北海道大学とともに、皆さんの茨城大学の参加が決定しました。温暖化や酸性雨などの地球環境問題、増加する世界人口と水や食糧、健康の確保、経済のグローバル化など現代社会の諸問題は地球規模に広がり、その中で「地球社会を持続可能なものへと導く」ための新しい学問を構築し、世界をリードする研究拠点として、地球・社会・人間システムの問題を修復するビジョンを提示しようとするもので、ここに地方国立大学である本学の参加が決定したことは、内外から大きな関心を呼んでいるところです。厳しい環境にあっても、全国有数の地方国立大学を目指している茨城大学は、着実に発展していることを皆さんに知って卒業して戴きたいと思います。

さて、私は本学を卒業したみなさんに次のことを期待したいと思います。

第一に、これからは特に、決まり切った考え方、ステレオタイプな考え方、付和雷同的な考え方をしないで、自分なりのしっかりとしたものの方・考え方を心がけてほしいということです。

たとえば、ここ数年、日本社会のありようについて、考えさせられることが多くなりました。ひとつ例を挙げます。今の社会は「官から民へ」の大きな転換期にあります。これまでは「官」、つまり政府や行政が多くの権限や業務を抱えていて、民間に任せないできました。これは国民や住民の福祉などのサービスや業務は民間に任せるのではなく、基本的に政府や行政が大きな責任を果たすべきであるとの理由に基づくものです。しかしこれは、いわゆる「大きな政府・大きな行政」の考え方につながります。しかし、少子高齢化が進み、さらに長年のツケがたまって国や自治体が膨大な財政赤字を抱えるとともに、今や「官から民へ」、そして「大きな政府・大きな行政」ではなく、「小さな政府・小さな行政」は、国をあげてのスローガンになった感があります。なんでも「官から民へ」、すべてを「市場」の世界に投げ込んで競争させれば世の中はよりよくなる。これが今は絶対

的に多様な考え方になっています。

私もこれは一面で正しいと思います。とりわけこれまでの日本社会のように、「官」、つまり行政が本来なら民間に委ねてしかるべき分野や業務を、様々の規制やルールを設けることによって民間が入ることを規制したり排除してしまい、結果として「官」が独占してしまいます。さらに、そのルールづくりや規制する業務に関わる役所や公務員が増え続け、政府や行政は大きくなり過ぎ、そして多くの無駄遣いをするという結果をもたらしました。その意味でも政府や行政の関与する分野や業務をもっと絞り込み、そこに「市場」と「競争」を持ち込み、「官から民へ」という方向は、向かうべくして向かっている方向であり、流れであると思います。

しかし、一方で、大学で学んだ者には、これについては別の見方もあるということも知っておくべきだと思います。

先日ある新聞紙上で前の東大総長の佐々木毅氏は、すべてを「民」の世界に、つまり「市場」の世界にして競争させることは、世の中を弱肉強食の世界に、倫理や正義による規制が働かない世界にしてしまいかねないことを知るべきだと述べています。私たちの先人達は、長い時間をかけ多くの努力を費やしなが、強い者がすべてを独占し支配する「市場」の世界を、少しずつ改善し、いろいろなルールをつくることによって、そこに倫理や正義が少しでも働くようにしてきました。さらに佐々木氏は、そうしたルールをつくったり、規制に基づいて「市場」を監視したりするには相当のコストが必要であるということも知るべきだと言います。つまり、近年、日本社会に急速に広がっているステレオタイプな見方・考え方。いつでも「官」は悪くて「民」は正しい、いつでも政府や行政や公務員は悪くて民間は正しい、だからそのためにはすべて「市場」にして競争させればよいという考え方は、やはりステレオタイプであり、あまりにもそれが行き過ぎると、それでは好き勝手や早い者勝ちがまかり通る倫理や正義の通らない世界への逆戻りを私たちが認めるのかということになることも知っておくべきだということです。

この「官から民へ」という現在の流れを例にして私が皆さんに申し上げたいことは、大学で学んだ皆さんには、いつでもステレオタイプと化した考え方に付和雷同するのではなく、自分なりのバランスの取れた考え方をすること、すなわち節度のあるものの見方・考え方をぜひ心がけてほしいということです。すなわち、他人はそう言うけれども必ずしもそうでないかも知れない。それではどう考えればよいのか。それを自分なりに深めていく。それこそが大学を出た者に求められる知性であり節度のあるものの見方・考え方であると確信しているからです。

第二に、今、私達が憂慮を深めるのは、癒しの時代とか労りの社会をつくるのが大事だなどと言われているのとは裏腹に、次第に私達が寛容の精神、つまりお互いに譲り合ったり、お互いを許し合ったりする精神を喪いつつあるのではないかとことです。気持ちや心の余裕を無くし、すぐに感情の赴く



ままに相手を責め立てたり、さらに力や暴力に訴えるという風潮が支配的になってきていることは事実です。自分には甘く他人には厳しいという風潮も強まっています。

これから皆さんは、自分は正しいことを主張しているのに、それが必ずしも通らないことも経験するでしょう。そうした時に、みなさんが大学教育で学んだことを生かすとすれば、それはどうすることなのでしょうか。そのポイントを一言で表現するならば、皆さんは、自分を主張するに当たって、もちろん力や暴力や姑息な手段に訴えるのではなく、とにかく与えられた仕事への努力を通して自信を持って自分を主張すること、それに尽きると思います。同時に、また今自分が考えているのとは違う別の考え方があるかもしれないから、簡単に物事を決めつけるな、人を間違っていると決めつけるな、自分が正しいと思っていることは、あるいは自分の思い込みかもしれないぞ、という疑いや柔軟性を持つということだと思っています。

今、みなさんは、本学を旅立ちます。これからは健康と自己管理に十分に気を付けてください。これは社会人として要求される最低限の条件です。

これから進むそれぞれの進路で、思う存分に頑張ってください。あるいは時として辛い状況に陥ることもあるかも知れません。しかし、そういう時でも、自分を卑下したり、自分を捨てたりしないで、とにかく頑張ってみてください。焦らずじっくりと仕事に励んでください。

—昨日、第一回ワールド・ベースボール・クラシックが終わり、われらが王 JAPAN が優勝しました。変な審判、変なルール等々に泣かされ、一度は諦めかけたのに、奇跡的に生き残り、そして最後は感動的な優勝でした。みなさんもそうだったと思いますが、私も感動したひとりで、優勝が決まった瞬間は、たまたま運転中であつたにもかかわらず、思わず「やった！」と大声を上げたほど興奮しました。

さて、この第一回ワールド・ベースボール・クラシックでの日本チームの優勝が私たち

国民ひとりひとりに伝えたメッセージは何だったのでしょうか。言うまでもなく「ネバー・ギブ・アップ!」「諦めずに頑張れ!」です。どんなに大変でも、どんなに辛くても、どんなに困っても、投げてしまわず、あと一頑張りしてみる。最後まで諦めずに頑張り努力するのが人間なのだ、ということだと思います。そうすれば神様は、時には、頑張る人達や努力する人達を見捨てないで最後のところで手を差し伸べてくれることもある、ということではないでしょうか。グローバル化がさらに進み、競争が激化するこれからの皆さんの将来は決して楽ではない、むしろ多くの困難が待ち構えていることでしょう。しかし、どんなに大変でも決して投げずに、諦めずに、希望をもってさらに頑張ってみてください。なぜなら、人間は希望というものを持つことのできる唯一の動物であるからです。

私達茨城大学の教職員は、みなさんが健康で精一杯活躍してくださることをいつでも祈っています。そして誰よりもみなさんの後輩達はみなさんの頑張りに心からの声援を送っています。是非、茨城大学の多くの後輩達の道しるべになるような活躍をしてくださるよう期待してやみません。

茨城大学もまた、これからみなさんが頑張っていく時の支えになれるような、みなさんが誇れるような大学になることを約束したいと思います。

最後に、改めて卒業を祝い、はなむけの言葉といたします。卒業本当におめでとうございます。

平成17年度卒業生答辞

第54回卒業生総代

理学部 新明健一



本日は、私達卒業生のために、かくも盛大なる式典を催して頂き誠にありがとうございます。学長先生はじめ諸先生方、御来賓の皆様卒業生を代表して深く感謝申し上げます。

また只今は、学長先生から励ましのお言葉を賜り、ありがとうございました。私達一同は、このお言葉をしっかりと心に刻み、それぞれの新しい道のりを若者らしく堂々と歩んで参ります。

思い起こせば四年前の四月、ここ武道館で入学式を迎えました。新しい生活、新しい

出会いに期待し、胸を膨らませていたあの春の日から、はや四年の歳月が経ち、今日という日を迎えました。その過ぎ去った日々の中で、卒業生一人一人が様々な体験、様々な人との関わりを通じて多くのことを学び、大きく成長することが出来たと確信しております。

一度、社会に目を向けてみますと、国際間の対立や民族間の紛争が世界各地で発生し、世界平和への道はまだまだ険しいように思われます。また、科学技術や産業の発展により我々の生活が豊かになる一方で、環境問題やエネルギー問題などが前途に大きく立ち塞がり、人類の未来に対する警鐘がこれほど大きく鳴らされたことはなかったでしょう。しかしながら、このような問題は科学技術の更なる発展により解決することが出来ると信じていますし、我々の世代が科学だけではなく、あらゆる分野でそれらの問題に取り組んでいく必要があると考えられます。そのために大学で得られた学問的知識、経験を土台とし、更なる努力を重ね、日々邁進していこうと思います。また、大きく移り変わる激動の時代の中で65億人の中から奇跡的な確立で出会えた多くの学友はかけがえのない宝であり、楽しみ、苦しみを分かち合った大学での日々を決して忘れることはないでしょう。

本日私達は、茨城大学を卒業します。明日からは皆がそれぞれ新しい人生を歩み始めます。就職して社会人として生活を始めるもの、専攻する学問を更に追究すべく進学する者様々ですが、本学で培った経験や知識が、新しく歩いていく人生の中で大きな力となることを確信してやみません。御列席の皆様におかれましては、これからも温かいお心で私達の成長を見守っていただけるようお願い申し上げます。

最後に、母校を去るにあたり、四年間の大学生活を支えてくれた家族に、この場を借りて深く感謝いたします。また、学長先生をはじめ、これまで御指導下さいました諸先生方、ならびに、ここに御列席の皆様のご健康と茨城大学の限りなき発展をお祈りしまして、卒業生答辞と致します。

4 大学大学院連携協定を締結しました - 茨城大、宇都宮大、群馬大、埼玉大 -

平成18年3月28日、さいたま市内において、茨城大学、宇都宮大学、群馬大学、及び埼玉大学の4大学は、大学院における教育研究の円滑な推進と、今後のより一層の充実を図ることを目的とした連携協定を締結しました。この協定は、大学院教育における「実質化」、研究連携及び産学連携の推進、及び学位の国際通用性の向上及び大学院教育の国際化を図ることを目指しているものです。

大学院制度は「学位を与える課程である」こととする平成17年9月中央教育審議会答申に基づき、課程の目的を明確

にし、学位授与へと導く体系的なカリキュラムを編成・実施するものですが、1大学のみでの実施は、専門家の不足や、専門分野の量・質ともに極めて限定されたものになることから、この4大学連携はこれを効果的に実現しようとするものです。

また、同一専門分野の研究を行っている教員が連携し、関連の研究を行っている教員を相互に派遣し、新たな教材の開発、講義、ゼミナール、学位審査等で協力し、或いは共同研究の実施を通して、学生に自己の研究分野を広く体系的に身に付けさせることが可能となるものです。

さらに、企業及び国公立研究機関の技術者、研究者がこのような連携に参画することによって、現社会のニーズに応えられる創造性豊かな研修者・技術者の育成が促進されるとともに、企業の技術者の再教育・次世代技術者の育成への貢献も期待されるものである外、外国人教員を招聘し、講義及び学位審査への参加を得ることにより、学位の国際通用性の向上、及び教育の国際化を図っていくものです。

協定締結式では、4大学学長による協定書の署名が取り交わされ、署名後、力強い握手が交わされました。次いで、各学長から、各大学が一丸となって取り組んで行く旨及びこの協定に係る今後の決意・期待を交えた挨拶があり、詰めかけた報道陣からも数多くの質問が寄せられるなど、予定時間を大幅に経過しての活発な質疑応答が行われました。



協定書署名後握手を交わす各学長

(左から、菊池茨城大学長、菅野宇都宮大学長
鈴木群馬大学長、田隅埼玉大学長)

- 「NHK 県域デジタルTV放送」

茨大タスクフォースだより 2月号 -

毎週木曜の18時35分から、NHK水戸放送局公開スタジオ「わいわいデジタル便り」のコーナーでは、本学や筑波大、東京芸術大取手キャンパスの学生が提供した映像作品が紹介され、併せて、企画・撮影にあたった学生たちが司会者とトークを行っています。

平成18年2月9日(金)・・・茨城発見 第一弾！ 木葉下町の三つの謎

(人文学部コミュニケーション学科 椎名洋平くん)

茨城県には変わった地名が多い。「潮来」、「瓜連」、「大足」、「全隈」など。ある日学生が地図を見ていると水戸市西部に不思議な地名「木葉下」を発見！！この地名はなんて読むのだろうか。また、この地名の由来はなんだろうか。

この地名に興味を持った学生3名が、この地名に造詣の深い大人たちを訪れ、様々な説を調べ、考える。また、そのなかで様々な説の背景にある歴史や調べている人たちの浪漫を知っていく。

私たちの身近にある地名の由来を探索し、想像する楽しさを伝えました。



写真の左端が ローマス・孝美さん
右から2人目が小田切アナ

NHK水戸放送局公開スタジオにて

左から：ローマス・孝美さん、桜井さん、椎名くん、小田切アナ、石村くん

NHKでは、地元にある大学で学ぶ学生たちの自由な発想による映像作品を紹介し、視聴者に興味を持ってもらえるコーナーを目指しているそうです。皆様のご協力をお願いいたします。

デジタルテレビ放送は、生協の1階食堂と大学会館食堂のテレビで見ることができます。

- 「NHK 県域デジタルTV放送」

茨大タスクフォースだより 3月号 -

毎週木曜の18時35分から、NHK水戸放送局公開スタジオ「わいわいデジタル便り」のコーナーでは、本学や筑波大、東京芸術大取手キャンパスの学生が提供した映像作品が紹介され、併せて、企画・撮影にあたった学生たちが司会者とトークを行っています。

平成18年3月9日(木)・・・ ホワイト・デー大作戦 & うら谷津再生プロジェクト
(放送研究会:人文学部社会科学科 森島かおりさん)
(農学部地域環境科学科 小名木卓磨くん)

バレンタインデーのお返しに毎年何をあげようか悩んでいる男性は多いと思います。そこで、私たちは水戸市内で、高校生、大学生、主婦にインタビューをして、年代別に結果をまとめました。

私たちは農学部のある阿見町の耕作放棄地再生に取り組むボランティアグループ『うら谷津サークル』です。私たちが活動する《うら谷津》は、約4haの谷津田と10haの山林がある場所で、そこを地元住民の方々は《うら谷津》と呼んでいます。ここの耕作放棄はすでに約30年に及んでおり、私たち学生と教職員が《うら谷津》のある地元上長地区の農家の呼びかけに応え、地元農家や市民と一緒に耕作放棄地の再生活動に取り組み始めたのがちょうど2年前のことです。この耕作放棄地での自給菜園の取り組みを地元市民の方々にも広げていくとする取組みを紹介しました。



右から3人目が小松アナウンサー
右側の2人が放送研究会
左側の3人が
うら谷津再生プロジェクトの皆さん

NHK水戸放送局公開スタジオにて

左から:元尾くん、山下さん、小名木くん、小松アナ、岩佐くん、森島さん

NHKでは、地元にある大学で学ぶ学生たちの自由な発想による映像作品を紹介し、視聴者に興味を持ってもらえるコーナーを目指しているそうです。皆様のご協力をお願いいたします。

デジタルテレビ放送は、生協の1階食堂と大学会館食堂のテレビで見ることができます。